

尋で起り、内外頗る多事を來したり。是に於て湖查の一族噶塔朱里亞カッタチュリカ此機に乗じて又密に喀什噶爾に入らんとす。同年道光二十七年噶塔朱里亞其の族六人を率ゐる吉爾幾思、欽察克人等チムチャツクを糾合し遂に喀什噶爾の回城に據り、進んで葉爾羌を攻む。清兵邀へて之を擊破す噶塔朱里亞退いて喀什噶爾を保たんとするも、住民門を閉ちて納れず。會、伊犁其他の清兵大舉して、阿克蘇に次し、將に喀什噶爾に向はんとす。噶塔朱里亞狼狽して浩罕に走る。從て喀什噶爾の回民、其罪を懼れ、同じく走る者男女老少二萬有餘、途に鐵列克嶺を超ゆるに當り、時恰も嚴寒に際し、山中雪に遭ふて半は凍死すと云ふ。

此の如き騷亂ありしにも拘らず、清廷は尙ほ浩罕に讓る所あるに因り、浩罕益々暴慢を逞うし、爾來數年、湖查は一意、喀什噶爾を獲んと試みたりしも、邊防固うして入るべからざりしが、咸豐七年千八百五十年湖查、挖利汗朱里亞、遂に其意を達せり。然れども彼れ性殘忍、誅戮至らざる無く、人々危疑相顧みて難を諸方に避くる者多し。會、清の大軍伊犁より進む。賊兵潰走し、挖利汗禁すること能はず、喀什噶爾を領するもの僅に四箇月、又走て浩罕に入る。湖查の喀什噶爾を亂すこと前後四回なる